

医学部薬学科から薬学部独立の頃の思い出

旧教員 奥野 洋明 (10期 1967年卒)

教養部からの移行

学部移行に際しては、我々昭和38年度入学生から急遽、教養部の成績が優先されることになった。まさに「青天の霹靂」！「山師」指向は排除された。当然と言えば当然なのだがね・

「ハレの日を迎え」先ずはつきり覚えているのは、学部移行のセレモニーが医学部の大きな階段教室で行われたことだ。冒頭挨拶は当時の医学部長のお出まじだった。昭和39(1964)年移行時の秋はまだ医学部だった。

思い過ごしかも知れないが今にして思えば、薬学の先生方は長年の望みだった「協議離婚」が成立し、「独立宣言」が可能となったよろこびを噛みしめていた雰囲気だったかな？ なんか違和感と云うか、お互いどこかよそよそしく、おかしな印象が残った。

どのような期待を持って医学部薬学科に進学したか

この件は申し訳ないことに、ご期待に添えない。直接的に参考になるコメントはでない。小声で言うが、正直なところ薬学に対して確たる目標があったわけではなく、主体性に乏しかった。結果的には少人数のメリットで仲間意識が築かれ、和気あいあい、生涯の友人、良き先輩、先生方に恵まれハッピーだった。

医学部の校舎の様子

講義室は、今にも倒壊しそうな古めかしい木造の校舎だった。通称「シベリア街道」と呼ばれる、歩けばギシギシ、ウラ寒く、寂しく、長い木造の廊下でむすばれ、講義室と研究室は12条(薬造、薬化、分析)と教養付近(衛生、薬剤、薬効、生薬)に分散していた。

学部講義や学生実習の様子

有機化学系が多かった印象がある。M先生の講義中は必ず学生を名指しての質問があった。でも幸いなことに、いつも名簿の初めのヒトが指名されるので、「良い先生」だったな。Aサンも覚悟ができて

いたのではないか。

テストは厳しく、ヴィーコンはもとよりトリコン、テトラコンなる「流行語」がまかり通っていた(和製独語?)。とは言え常連メンバーは概ね決まっていて、顔を見せないと「彼はどうしたんだ」、と「心配する」連帯感が育まれていたのである??

一部講義室で冬は石炭ストーブが使われていた。

医学部ゆえか解剖学の講義があった。たまたま法医解剖が行われていると、見学の機会が与えられたことを思い出す。大層貴重な体験だったが、ちょっと複雑な気持ちになった。

化学系学生実習室は石畳の? 牢獄のような、暗く湿った何となく地下壕を思わせる場だったかな? しかし、雰囲気は良好で、同期40名はもとより若手教官や先輩・院生もかなり身近で温かな存在だった。

研究室移行と研究室の様子

移行希望教室への割り振りは、学生自身に委ねられていた。研究室定員と希望者数に大きな偏りがあるため、調整役の一人としては結構苦勞した。かなりの時間を費やしたが、皆の協力を得て何とか収まった。ちなみに、この時点では「合成」と「有機」の新設講座が決まっており、それぞれ移行対象研究室であった。

研究室の設備や器具、雰囲気、研究の様子、研究費など

筆者が属したのは新設化学系講座だった。新教授はもとより、若手教官、院生は大張り切り、やる気満々の心意気が伝わってきた。実験設備や器具類は、今なら博物館物と云われそうな“立派な”年代物がほとんどだったと思う。実験室のひとつにはなんと「逆流する」ドラフト? が設えられていた??。必要時にはドラフト内でガスバーナーを燃やしながら強制的に空気の流れを作るという芸当だから・推して知るべし! いやはや! 恐るべし!

卒研は、院生の下での「修行」から始まった! すりガラス器具が使えて、学生実習に比して格段の便利さだった。ただ、すりガラスコルベンなどは数に限

りがあり、個々の特徴を覚えているほどであった。加えて、どうしても先輩を優先する「謙譲の美德」から必然的に夜間の実験が多くなった。シュラフ(寝袋)を持ち込んでの終夜実験も日常化で、今思えば有機溶媒の「かおり」に包まれ、大変危険・不健康なことをしていたことになる。恐らく他の研究室でも同じような状況にあったと見え、ほぼ不夜城だった。ときには、他の研究室で、白衣に火が付いたとか、思わぬトラブル勃発でアラームが鳴り響き大騒ぎしていた記憶もある。くわばら、クワバラ、恐ろしや！

卒業発表会の様子

申すに及ばずパソコンやパワポなどはない時代だった。発表会が迫ってくると、遅ればせながら自分のテーマが意味するところの理解を深め、構想を練り、配置を工夫し、厚紙を使って構造式の型作りをしたり、簡潔な説明文を挿入したりと創意工夫を必要とした。そして大きな模造紙に太いマジックペンで手書きする。ひとり当たり 5 枚ぐらい使ったのかもしれない。リハーサルで手直しを求められると書き直しも必然。この過程では凝り性の人、さっさと手早く済ます人など、個性が大きく反映される。そんなこんなで、準備と本番発表会はお祭り騒ぎとなった。これも良き思い出のひとつ。

卒業・就職と大学院進学

聞けば当時大学院の先輩方はいわゆる「免許貸し」で生活費の一部を賄っていたと云う。ああそれなのに、それなのに、せっかく院生になったと思いきや、時期を同じくして道庁が急に「免許貸し」禁止令を出してきた。そして、なんとその責任者に「薬学部長」を据えてきた。当然のように我々に「お達し」が流れて来た。狙い撃ちだ！やるもんだ、やるもんだ！我々に為す術なしと思いきや、思いやり深い仲間が多かったので、奨学金をプールする善意の苦肉策も実現した。他の代替策をと思えども妙案浮かばず、厳しい現実となった思いがある。

おわりに

半世紀超以前のこと故、記憶違いや思い違い、卒研時や院生時の記憶が混在する可能性があります。ご容赦をお願いします。

同窓会 HP:2022 年 11 月 4 日公開